Ⅰ　ＩＣＵ日本語教育プログラと学習者のニーズ

中　村　妙　子

１．はじめに

国際基督教大学（ＩＣＵ）における留学生の日本語教育は１９５３年にさかのぼる。それは日本の大学における日本語教育の嚆矢であった。そのときの日本語教育の目標は大学の日本語でなされる授業を受け、講義内容を理解し、レポートを書くなどして大学を卒業していける日本語の運用能力を習得することであった。１９５６年にはさきの INTENSIVE JAPANESE（１週２７時限）に対してELEMENTARY JAPANESE(１週３時限）のコースができた。これは短いコースが望まれて始められたたようである。１９６０年には、SEMI-INTENSIVE(１週９時限）ができ、卒業のための日本語能力だけでなく、すでに、学習者のニーズの多様化が始まっていることが読み取れる。しかし、筆者が１９６０年に日本語教育に携わったころの学習者の中から、言語学者、日本史の学者などを輩出しているところを見ると、現在の学習者よりは日本語の研究、あるいは、研究のための日本語学習という面があったと考えられる。このことは、学習者の多様化が取り上げられる現在よく指摘されることである。

２．ＩＣＵ日本語教育プログラムの科目

現在行われている日本語教育プログラム（Japanese Language Program)の科目を概観 すると、以下のようになる。

（１）日本語集中教育Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ　（１週２２時限）

総合的な話しことば、書きことばの初級、中級コース。

Ⅰ　発音、初級文法、初級語彙（１２００）、かな、漢字（４００を学習し、話しことばと書きことばの両方で、自分のことが表現でき、必須の日常生活ができる。

Ⅱ　種々の分野の書籍、雑誌、新聞などに載っている資料を読む。漢字（４００累加）。さらに進んだ口頭表現、文章表現を学ぶ

Ⅲ　大学生に求められる学問的分野の生教材を学び、Ⅱに続きより

高度な口頭表現、文章表現を学ぶ。漢字（４００累加）。

（２）日本語Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ－Ⅳ－Ⅴ－Ⅵ　（１週１０時限）

総合的な話しことば、書きことばの初級、中級コース。コミュニカティブなものを目指し、日本語集中教育のほぼ半分のペースとなる

Ⅰ　基本的な文法・文型、初級語彙、かな、漢字（１５０）を学ぶ初歩のコース。

Ⅱ　Ⅰに続き初級の項目を学ぶ。漢字（１５０累加）。

Ⅲ　初級文法、語彙を学習しⅠ、Ⅱを加え漢字（５００）を学ぶ。

Ⅳ　中級の始まり。談話の仕組みを学び、初級文法の復習を含む。漢字（２００累加）。

Ⅴ　現代の書籍、雑誌、新聞などに載っている資料を読み口頭表現文章表現を学ぶ。

Ⅵ　Ⅴに続き現代の書籍、雑誌、新聞などに載っている資料を読み中級の４技能を学ぶ。

（３）上級日本語［講読理解］Ⅰ（１週３時限）、Ⅱ（１週２時限）

上級日本語［作文および論文］Ⅱ（１週３時限）、Ⅱ（１週２時限

上級日本語［講義理解］Ⅰ（１週３時限）、Ⅱ（１週２時限）

日本語集中教育Ⅲ、日本語Ⅵに続く科目。上級日本語の目標は大学で日本語でなされる大学での講義に参加出来ることを目指す。読解（各種作品の精読、速読）、　論文（各種テーマで書く。）。聴解（録音、録画された教材で学ぶ。）

（４）日本語特別教育Ⅰ－Ⅱ－Ⅲ　（１週３時限）

日本語の話しことばはできるが読み書きの能力が十分でない学生のための科目で読み書きの集中的教育が行われる。

以上４種類のグループに分けられるが、目標としているのは、大学生として、日本で生活し、日本の大学で勉学できる日本語運用力を身につけることである。読み、書き、聞き、話すという４技能を習得する総合的な日本語教

育である。これら１８の科目の目指すものが、学習者の学習の目標、あるいは、学習者の期待するもの（学習者のニーズという言葉と置き換えてもよいであろう）と合っているのかどうか検討しなければならない。確かに、４年間をＩＣＵで学び卒業していく外国人学生は毎年少数の学生しかいない。大多数は、１年間ＩＣＵで学ぶ１年本科生と、主として日本語を学びに来る研究生である。そのような学習者にとって現在の科目で十分なのかどうか考えなければならない。さらに、学習者のニーズのみならず、教師側が学習者に期待している、教師側のニーズといわれるものとの隔たりについても考えたい。

３．学習者のニーズをどのように調べるか

学習者のニーズをどのような方法で調べ、把握してきたのであろうか。はっきりとニーズ調査とはいっていないがそれが汲み取れるものはいくつか挙げられる。

ａ．入学申し込みの際の書類：日本語学習歴とともに希望のコースを書く。

ｂ．各コースで行うアンケート：授業の最初あるいは中間に教師の判断で行う。どのような日本語運用力のつくことを期待しているのか。将来、日本語をどのように使うつもりかなど。

ｃ．日本語教育プログラムのアンケート：１９８９年より実施されコース終了時に行われる。今回の紀要に詳しい。

ｄ．集中日本語教育のEvaluation:１９７５年ごろより行われ、教科書の内容、クラスの在り方について書く。ｃ．のアンケートが始まるまで続けられた。

ｅ．学生部のアンケート：１９８９年より実施。留学生の帰国の際に日本の留学生活一般のほか日本語の教育にも触れられる。

ｆ．学生が出す要望書：教養学部長などに授業の内容、コースに対する意見などを個人的なレベルで出す。

ｇ．授業形式での取り上げ方：討論や作文の形式で学習者の意見をきく。

その他、教師のオフィスアワーで学習者の意見を聞いたり、学習者もいろいろな機会に教師に自分たちの意見を伝える。学習者たちはいくつかのチャ

ンネルを使ってコースにたいする評価、自分のニーズに合っているのかどうかを示すことが出来る。また、学習者の気質にもよるが、アメリカ系の学習者は自分の意見を率直に表明するように観察される。

4．学習者からの評価をどのように扱ったか

学習者からの評価、また、それを通して見えてくる学生のニーズがこれまで多く出されてきた。それをどのように吸収しフィードバックしたのであろうか。システム化してそれをどのように処理するかという点はまだ決定を見ていない。しかしながら、各コースの学期末の会議などで教師たちがアンケートに目を通し、議論し、自身の反省材料にしたり、あるいは、励ましとして受け取ったりする。コースにおいて修正可能な点は取り入れ、それがコースの運営やシラバスに反映してきた。

学習者のニーズ、評価に対応するには、大きすぎる問題もあった。学習者のニーズに合わないものを列挙すると、つぎのようになる。

a．コースの目標

b．教科書の内容

c．４技能の習得

d．１週間の時間数

e．教師の質

f．教師の数

g．クラスの人数

a～dはカリキュラムの改編によってかなりの部分が解決される。e～gは機関の援助と理解がなければならない。さらに、学習者のニーズとともに教師が、あるいはＩＣＵとしてどのような日本語教育を展開しようとするのかが、重要なポイントであろう。

5．カリキュラムの改編

学習者のニーズの多様化、学習理論の変容などに対応するべく、１９８８年から会議を重ねて日本語教育プログラムのカリキュラムの改編が、進められてきた。学習者のニーズを考えつつ、ＩＣＵでなしうる日本語教育のプロ

グラムを模索中である。現在の時点で進む方向として分かっているのは、つぎの諸点である。卒業の要件となる日本語の単位数を現在のものより少なくし、中級からのコースを卒業の要件とする。卒業の要件となるコースと要件とならないコースを作り、互いに独立させて、それぞれを多様化に対応できるものとするなどを骨子としている。現在は１９９１年７月に文部省より出された大学設置基準の大綱化により大学全体のカリキュラムの見直しが行われ、大学の枠組みのなかでどのように改編できるかを検討中である。１９９５年には新カリキュラムを発足できる予定である。その際には、学習者のニーズをより広く吸収したものになるであろう。

６．まとめ

学習者が学びたいことと教師の目指す教育とがお互いに合致し、そこに日本語教育が行われるならば、それは理想に近いものであろう。大学という機関の一部であるという外的条件、また、教師集団の日本語教育に対する教育観の相違など、検討しなければならない問題は多い。学習者のニーズを正確に把握し、外的な条件の調整をしながら、学習者も教師も満足のいく日本語教育とは何なのかを問いつづけ、どのような条件が整えば実現できるのかを具体的に検討すべきであろう。

参考文献

ＩＣＵ日本語教育研究室編、『あすの日本語教育の道を求めて』、凡人社、１９８７年